
君と僕。

闇音ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

松岡 春 男です W W W

メリー 春と付き合ってる、千鶴のモトカノ

光音 輝 夜と一緒に歌手をしている

その他大勢・・・。

日常

僕らはいたって普通の高校生。

今年で3年生になった俺は、フラれてしまった。

ちょっとは落ち込んでるけど、さすががしさが残る失恋の後だった

彼女に出会ったのは。

「気持ちよかったあ〜〜!! ねー春ちゃん!」

「そうですね。ちょっと熱かったですね。」

「え〜普通はあれくらいでしょ?」

今俺たちは、修学旅行中。

そんでもって、温泉に入った後だ。

「ほら、早く部屋に帰りなさい。」

「え、ちょっとだけならいいじゃん！のぞいても。」

「ちょっと！千鶴君?!」

「そつだよ。見たって面白くないよ。小さいし。」

「お前、女子に謝れ。失礼だぞ。」

いろいろ言われてめんどくさくなったから、俺たちは部屋に戻った。

悲鳴

「祐太あゝ・・・」

「しょうがないでしょ祐希。班が違っただから。」

祐希は祐太の双子の弟。

いつも一緒のため、部屋が違っのに反対していた。

「春ちゃんと、変わったらしいじゃん！」

「えゝ、嫌ですよ先生に怒られちゃいますよ。」

春ちゃんはまじめだ。
でも、ものすごい天然で、鈍感でもある。

実際、メリーに告白されるまで何も知らなかったって知った時は
ホント、ビックリした。

「春、お願い．．．」

「そんなに、頼まれても．．．」

「何があつたんですか？」

「ストーカーに襲われたんだって。」

「え！？」

外は雨だったため、声の主は、ずぶ濡れだった。

千鶴は、とっさに手に持っていたタオルを渡した。

「大丈夫ですか？」

「……あ、ありがとうございます。」

顔を見たら、すぐ同い年なのが分かった。
でも一応聞いてみた。

「年いくつですか?？」

「あ……高3です。」

やっぱり俺らと一緒にか。

「家このへんなんですか?」

「いえ。旅行で……」

そうですか、と、会話はときれときれだったけど、なんか思った以上
大丈夫そうだった。

泊り

「にしても、そのままだと風邪ひいちゃうね。」

「風呂入ってきたら??」

バカか!と要つちに怒られたけど、東先生は優しい。

「そうだね。警察も明日に来るって言ってるし……」

お、もしかして……

「うん、泊って行きなよ。」

おおおおお。

って・・・何喜んでんだ！？オレ。

初対面なのに？初対面だから？？

「え、ホントに？？」

「うん。お風呂入ってる間に、部屋とかも準備しとくね。」

「あ……はい。」

あれ？なんか嫌そう？
……そんなことないか。

コンコン……

「あ……絶対に怒られませんか？これ。」

「男なんだからしょうがないじゃん！」

「しょうがないじゃん！じゃねえよ！帰るぞ！！」ってあああああ
ああああ！！！」

彼女は、しばらくして東先生と部屋にやってきた。

「あ、先生。どうかしたんスか？」

「うん。ちょっと聞いて。」

この話の内容はとんでもないものだったなんて・・・

部屋

彼女の名前は、闇音 夜。

蘭歌女子高校の
3年生。

学校の記念で、一週間休みの間、なんとひとりで京都にやって来たらしい。

「それでね、部屋なんだけど、女子満員で・・・」

「え!?!」

「で、男子で入れてくれるとこ探してるんだけど・・・」

「こんなのってありかよ・・・!？」

「でも先生。この部屋、三人は厳しくないですか？」

「うん。そうだね。」

「どうしようと先生が困っていると、」

「祐希、お兄ちゃんとこ来る?。」

「行く！」

これで二人になった。

「じゃ、これでいいね。」

え！？これでいいの！？

「よくねえだろ。」

俺の心呼んだかのように要っちが言った。

「こいつ、超スケベだし。」

「やっぱり、春が変わってやれば？」

「そんなことしなくていいし！初対面なんだしなんもしねえよ！！」

この瞬間、全員が大丈夫かなあと心配したのだった。

まくら投げ

く夜サイドく

なんか、大変なことになっちゃったな・・・。

「あ、あのさー！」

「あーはい。」

「えー・・・と。」

変な空気にならないように気を使ってくれる!？

なんか、かわいいタイプだな。

「橘君……ですよね?あの……もし、向こうに行きたかったら
行ってもいいですよ。」

「へ?？」

「なんか……まくら投げとか……したいんじゃないですか?」

見るからに中二病だもん。やりたいだろうな……。

私も!?

めちゃくちゃな戦いが始まった・・・

発熱

15分くらいたったあと。

みんなクタクタだ。

「闇音さん凄いですね……。」

「いえ。これでも大分久しぶりですよ。」

でも、やって良かった。楽しかったのは本当だし。

その後、メガネくんに橘君は殴られてた（笑

「ありがとうございます。」

「へ？」

「その・・・仲間に入れてくれて・・・。」

「楽しかった？」

「はい！」

橘君に、俺たち同級生だしたため口でいいじゃん。と言われたのはそのあとすぐだった。

あの5人の中で一番話しやすい相手だと思ったから

部屋が一緒に、ちょっと安心した。

1日目はだいたい遅くまで眠れないものだけど、みんなすぐに寝てしまった。

朝

「おはようございます。泊めていただきありがとうございます。」

いえいえと先生方が言う。

そろそろ帰らなきゃと思っていたら、ひとりの先生がこっちに来た。

「あの・・・なにか？」

「昨日よりかだいぶ元気になったみたいね。」

「ありがとうございます。」

先生の話は、頼みごとだった。

先生について行ったらそこは、昨日泊まった部屋。

「お願いできるかしら？」

なんと、元気だった橘君が寝込んでいた。

「熱・・・7度8分・・・。」

「行きたいよぉ〜・・・新撰組ラーメン・・・」

「今は安静にしてないとだめですよ。千鶴君。」

「何かあつたんですか?」

私がお風呂に入ってる間に、ホテルの近くの池に落ちたらしい。

もったいない・・・。

「おみやげ、ちゃんと置ってますから。」

「……ん」

「……して、看病は始まった。」

看病

みんながいところまでは起きてたのに、
私が、タオルや着替えをとりに行っている間にすっかり眠っていた。

眠ってるといってもやっぱり辛そう。

タオルを濡らしておでこに乗っけると、起きてしまった。

「しめんなさい。起しちゃいましたね。」

「ベシロイイよ……」

大丈夫って言うっても大丈夫に聞こえない。

「着替え貰って来たので、着替えてくださいね。」

「新撰組ラーメン……」

まだ言ってる……

そんなに食べたかったんだ・・・。

着替えてる間、部屋を出ていたら
東先生が来た。

「どづかしたの?」

「あの、橘君が熱出しちゃって・・・」

「それで、看病?」

「はい。頼まれて。」

思った以上に警察との話が早く終わったからよかった
先生がずっと見てるわけにはいかないし。

「夜……体温計どこ？」

「あ、いめんなさい、ここにありません。」

しばらくすると、体温計が鳴った。

「ん？」

「おおおおおー！！」

うわ！なんか元気になった！？

「熱下がった！！」

ガク！！！！

そんなすぐに下がっても、出してくれるわけではないのに……

「遊びに行こう!」

「だめですよ!」

「え?」

「まだ病み上がりにもなっていないんですから。」

えー、とは言ってたけど、なんとかねじ伏せた（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3363z/>

君と僕。

2011年12月16日00時51分発行